

光明

こうみょう

秋
—
第232号

〈特集1〉

生きる道しるべ

御詠歌とともに

第八番

豊山長谷寺御詠歌

いくたなも

まいるこころは

はるせとら

やまもちかおも

ふかそきたた川

白山合掌

興教大師

八百五十年

御遠慮記念

寄進

白友会 永井白山

元禄二年庚申

宗派トピックス

管長猊下入山式

〈特集2〉

お仏壇とお供えもの

しん こん しゅう ぶ ざん は
真言宗豊山派

光明

目次 秋
第232号

- 03 | 宗派トピックス
管長猯下入山式

- 05 | 特集1
生きる道しるべ
～御詠歌とともに～

- 13 | 仏道・心の処方箋④

- 15 | 弘法大師に学ぶ⑧

- 17 | 必見！長谷寺の寺宝⑦

- 19 | 仏教童話⑭⑬
話せるようになった娘

- 27 | 齋藤孝の
学ぶ楽しみ 心穏やかに生きる⑦

- 29 | 法事のしおり③

- 31 | ヘルシーうれしい 精進料理③③

- 33 | 作品募集 仏さまを描いてみよう！

- 35 | 特集2
なるほど仏事のQ&A拡大版
お仏壇とお供えもの

- 38 | こうみょうパズル



表紙写真
長谷寺御詠歌碑(総本山長谷寺)

管長猥下入山式

川俣海淳大僧正管長猥下にご就任



令和六年六月十五日、晴天のもと時折さわやかな風が吹くなか、新たに真言宗豊山派第三十五世管長総本山長谷寺第八十九世化主となられた川俣海淳大僧正の入山式が、総本山長谷寺にておごそかに執り行われました。

入山のご一行は長谷寺の門前町から出発します。川俣猥下にさしかけられた大傘が、やわらかい影をつくります。大勢のお稚児さんや僧侶と共に仁王門をくぐり、満開のあじさいに見守られながら登廊を進んでいきます。

観音堂においては川俣猥下が登壇し、新たな管長・化主として本尊十一面観世音菩薩さまに誓いの言葉述べる奉告法要を厳修されました。つづいて、本坊大講堂での

入山式典にて川俣猥下より、豊山派僧侶と檀信徒、および長谷寺有縁の方々が一っしにしてお大師さまの教えにたちかえり、また、観音さまのご加護を祈念すべきとお言葉を述べられました。

川俣猥下は御年八十三歳。ご自坊は長谷寺と同じ奈良県にある、岡寺（龍蓋寺）です。岡寺は一三〇〇年前、天智天皇の勅願により建立された、大変歴史のあるお寺です。また、西国三十三所第七番札所であり、第八番の長谷寺とは、古より深いご縁があります。

川俣猥下は長谷寺財務執事、法務執事などの要職を歴任された後、長谷寺寺務長を二期お務めになられました。令和元年には密教

教化賞を受賞、更には、京都府、奈良県内の教育委員会や文化財保護等に関わる役職も多数、お務めになられております。

さまざまなが速く、そして大きく移り変わる時代となりました。そのような世の中にあつて、川俣猥下におかれましては、御仏の智慧の光と慈悲のまなざしをもって、皆さまをお守り、そしてお導きくださることでしよう。



仏道・心の処方箋④

名取芳彦

「時は流れる」と言われますが、時は流れずに重なる」という言葉を目にした時、とても納得したおぼえがあります。

時間が流れ去るなら、良いことも悪いことも、おぼえていないでしょう。しかし、起きたことは地層のように重なっていく時間の中に残されていくのです。

その中に、黒いシミとして残るのが後悔ごうかいです。今回は厄介やっかいな後悔の弱め方、消し方について

「後悔の本質は、やったこととやらなかったことにはありません。やったとき、やらなかったとき、心の底からそう思ったかどうかだけなのです」

見事な決着だと思いました。この言葉を手がかりにすれば、後悔をうまく処理できそうです。

そのときにタイムスリップする

まずそのときの状況を思い出します。

自分ならできると思った、どうにかなると思ったなどがそのときの自分の思いです。周囲の人からも、チャンスだ、やってみないとわからないと背中を押されて、いわば外堀が埋まった状態だったでしょう。

だとすれば、そのときの選択肢は「やる」しかなかったのです。

こころの
天気は
自分で
晴らす



お伝えします。

二種類の後悔

外国人を対象にした座禅会を行っている友人が、参加者から「私たちが後悔するのは、やってしまったことですか、それともやらなかったことですか」と質問されました。彼は、すぐに次のように答えたそうです。

逆に、自信がなく無理だと思った、失敗したくなかったと怖おそじ気けづいたかもしれません。失敗したらどう責任をとるつもりだ、ほかにやる人がいるのに無理してやる必要はないなど、外堀も、しっかり埋められた状態だったでしょう。このケースでは、あなたに残された選択肢は「やらない」だけだったのです。

後悔をしないために

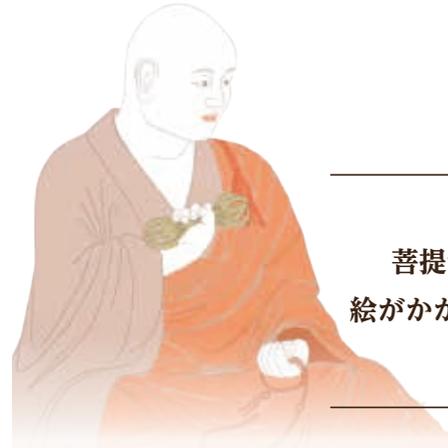
このように「あのとき、自分の選択肢はあれしかなかった」と、現在の自分が、心の底から納得すれば、黒いシミのように残っていた後悔は漂白されます。心の天気を自分で晴らせるのです。

これから何か選択するときにも、「自分は、心の底からそう思っているか」と自分自身に問いかけることで、後悔する頻度ひんどうは大きく下がります。

弘法大師に学ぶ

【相談】

菩提寺の本堂の奥に八人のお坊さんの
絵がかかっていました。あれはだれですか？



【回答者】高橋尚夫

真言宗豊山派総合研究院 前院長
大正大学名誉教授／埼玉 大王寺 住職

お大師さまの著作である『秘密曼荼羅教付法伝』に「道は自ら弘まらず、弘まること必ず人による。誰かよく弘むる者ぞ。すなわち七個の大阿闍梨あり。上、高祖法身大毘盧遮那如来より、下、青竜の阿闍梨に至るまで、嫡々相続して今に至るまで絶えず」とあります。お大師さまが入唐求法したときに、青竜寺の恵果阿闍梨に師事し、瓶から瓶へ水を移すように、すべてを受け継いで日本にもたらした真言密教の由緒正しい系統を堂々と表明したものです。

第一祖は大毘盧遮那如来で、真言密教のご本尊でもあります。その働きの一部が太陽の作用に似ているところから大日如来とも称されます。その大日如来の説法の相手が金剛薩

捶で、第二祖になります。ただし、この両祖は歴史的存在ではありません

ん。この金剛薩捶に教えを授かったのが龍猛菩薩で、真言密教を世間に流布させました。第三祖になります。そして龍猛は龍智菩薩に伝え、龍智を第四祖といたします。ただし、このお二人は歴史的な事跡については不明な点が多く伝説的な域を出ません。そして、この龍智の門下に善無畏（六三七〇〜七三五）と金剛智（六七〇〜七四二）の両祖がいて、いずれも唐にやって来て、教えを弘め、翻訳に従事しました。このうち金剛智三蔵を第五祖とします。その門下に不空三蔵（七〇五〜七七四）がいて第六祖とし、不空三蔵は恵果阿闍梨（七四六〜八〇五）に伝えたので第七祖とし、空

海（七七四〜八三五）が入唐して恵果に師事し、第八祖となります。以来嫡嫡相承して今日に至っています。

また、善無畏三蔵の門下に一行阿闍梨（六八三〜七二七）がいましたが、四十五歳で亡くなっています。そこで、大師に至るまでの祖師を根本八祖と言いますが、この八祖について、「付法の八祖」と「伝持の八祖」との区別があります。付法というのは真言の法門を嫡嫡付法したとの意味であり、伝持とは法を継いだ弟子のあるなしにかかわらず、すべて密教をこの世界に伝え任持させたとの意味です。したがって、伝持の八祖には大日如来と金剛薩捶を除き、善無畏と一行を加えて八祖とします。通常「真言八祖」と言うときは、この伝持の八祖を指します。以上を整理しますと次のようになります。

付法の八祖 大日如来 — 金剛薩捶 — 龍猛 — 龍智 — 金剛智 — 不空 — 恵果 — 弘法
伝持の八祖 龍猛 — 龍智 — 金剛智 — 不空 — 善無畏 — 一行 — 恵果 — 弘法

伝持の八祖のうち、龍猛から善無畏まではインド人であり、一行と恵果は中国人です。通常、密教寺院に架けられる真言八祖の画像はこの伝持の八祖です。先の大師のお言葉の中に、「道は自ら弘まらず、弘まること必ず人による」とありました。また「法は人によって弘まり、人は法を待つて昇る人法一体にして別異なることを得ず」（『秘蔵宝鑰』）という言葉もあります。仏教では教えを伝えていくことを法灯を継ぐと言います。蠟燭の灯火を次の蠟燭にともし、また次の蠟燭にともし、ともし続けることを無尽灯といいま

す。大師も「即ち無尽灯を燃やして願わくは遍く法界を明らかにせん」（『真実経文句』）と仰っています。

戦争の悲劇、地震や津波の自然罹災、悲惨な事故や事件、それらを風化させることなく語り伝えていくことが叫ばれています。これもまた法灯を継ぐと言っても良いのではないのでしょうか。まさに、たとえわずかな灯火があっても世の中を明るく照らすようにともし続けて行きたいものです。

伝持の八祖



不空 金剛智 龍智 龍猛



弘法 恵果 一行 善無畏